



## 幼児教育と特殊教育

愛育研究所員

津 守

眞

「雨が、雨が、降っている、きいてごらんよ、音がする、びちびち、ばちやばちや、音がする、そら、お池に降っている金魚はどうしているかしら」眞中においた金だらいのまわりに、皆とんでくる。「お、お、金魚がいるよ、ほら金魚だよ」指さして先生の顔を見るKちゃん。「金魚——」先生の手を引張つて、金魚を見せようとするM、「おと、ね、おと、ね」手足をばた／＼させてのぞきこむH、皆體中を動かして大騒ぎ、大喜びする。金だらいの金魚は實は先生が即席に作つた紙の金魚だが、誰も紙製だなどと疑わない。大まじめで大喜びである。此の金魚も一時間後には、網にのせられ、七輪にかけて食べられてしまつた。五月の或る雨降りの一日當研究所の發達遲退兒特別保育室の中である。窓の外は五月雨がしと／＼降っているが、保育室では楽しいお遊びが始まつている。

精神薄弱兒の施設というと、私共は何か暗い感じのする、一種獨特な雰圍氣を思い起す。子供は全く動きが少なく、ぼんやり突立つたり、腰をかけたたりしている。親は始末に困つて施設に放り出す。社會は或る種の輕蔑感をもつて憐憫の眼を向ける。そこには自ら一般社會とはかけ離れた一つの社會が出来上り、奇妙に沈滞した空氣が醸し出される。社會の人が精神薄弱兒と云い、或いは白痴、痴愚と云つて特別扱いにして、特別な性格を作り上げてしまふのである。精神薄弱兒と云つても、木や石とは違ふ。やはり同じ人間である。笑いもすれば、泣きもする。どこまでも特別扱いにして違ふ人種の様に見物していて良いものだらうか。

普通の幼稚園の子供に我々は始終接していて、一緒に楽しく遊ぶことが出来る。ナースリースタールの年齢の子供ともやはり楽しく遊ぶことが出来る。赤ちゃんでも抱いたりあやしたりして、大人は夢中になつて一緒に楽しむ。精神薄弱兒とでもそれなりに、やはり我々は一緒に楽しく遊ぶことが出

來る。たゞ同じ年齢の普通の子供と比較すると、一寸變だぞと思う。變だと思ひ始めるときりがなく、精神薄弱兒は何から何まで出來なくて、悉くが普通の子供と違つてゐるような錯覺を起してしまふ。餘りにも倅にはまつて考へるからである。先入觀なしに、こういう子供の中に入つていつたら、普通の子供と遊ぶことの出來る人なら誰でも、十分に遊び楽しむことが出來るだらう。

保育室のお遊びはまだ續いてゐる。やがておやつを食べてみんなお迎えにつれられて歸つてゆく。遊戯をして踊つて、おやつを食べてゐる此の子供達を見て、誰が不幸だと思つたらうか。誰が悲惨だというだらうか。私共は少しも慘めだとは思わない。子供達と一緒にゐる時はそんなことを考へてゐる餘地はない。此の子供達にも、適當な環境を作つてやれば幸福になることが出來るのである。彼らの顔は輝やいてゐる。

## 二

私共の研究所には毎年相當數の精神薄弱兒が相談につれて來られる。馬鹿につける藥はないと云われて、醫學的にも治療法なしと見放され、教育をしてくれる場所もない。大きくなるのを待つて收容所に送るか、就學を免除して家庭でおぼろ／＼させておくか、或いは就學の時期を後らして普通學級に入れ、それでも追いつけないで劣等兒というレッテルを貼られるか、道は狭い。精神薄弱兒と鑑定はついても、その対策

に困惑する。兒童相談において最も困る問題の一つである。

昨年の五月、やはり就學前のこういう子供の父兄で、極めて熱心な方が二、三あつた。自分の所の子供が發育がずつと遅れてゐるのはよく分つてゐる。その程度も分つたし、醫學的に處置のないことも分つた。しかしそれだからと云つて放つておけるだらうか。來年は此の子供達は學校に上る年齢になる。到底普通の學校に行けないことは分りきつてゐる。治療の對策がないからと云つて、家庭に放つておいて良いものだらうか。是非こういう子供の小さい年齢の人達のための教育機關が出來てほしい。これが兩親の側の主張だつた。

教育によつて一體どれだけのことが出來るか分らない。しかし家庭でも普通の子供と違つて、どの程度にどう風になつたらよいものか分らない。遅れてゐる子供だから可哀そうだと云つて過度に手をかけたり、或いはどうせ馬鹿だから仕様がなと云つて全く放任になつたりして、當然出來ることも出來ないで濟んでしまうことがある。又適當な遊びが相手がなく、社會的な刺戟に乏しくなり、外に出しても近所の子にいちめられる位が關の山だというので外にも出さないことにもなる。客が來れば外間も悪いので、一間にとちこめて出さない様にする、押入れに押しこんでしまふという極端な場合も起つてくる。こんな風に扱かれていたら、普通の子供でも健全な社會性の發達は望めないだらう。どうしても此の子供達にも明るい公明正大な環境と、十分に個人の能力を發揮し、社會性の發展する機會を與えてゆかなければなら

ない。教育ということによつて一體どのようなことが出来るか、それは疑問である。しかし上のような意味で、彼らの環境を調整し、作りかえてゆかなければならない、ということでは確かだろう。

### 三

近年、幼児教育ということが盛に云われて、小さい時から教育は大切だと誰でも考える。しかし小さい時からの教育とはどういうものか、ということになると誰でも分らなくなる。餘り教育に熱心なために、反つて子供を過度に神経質にしたり、云うことをきかない子供にしたり、或いは獨創力のない、大人のような子供にしたりすることもある。改ためて教育などと鹿爪らしく考えないで放つておいても、感心する位、良い子供もある。そうなると教育とは一體どういうものなのか、ますます分らなくなる。小學校位にもなれば、字を教えたり、算数を教えたり、教える材料が出来るからまだ教育らしくもなるだろうが、幼稚園やそれ以前では教えこむ材料が少ない。それに又教えこもうとしても子供の方でついて来ない。このことはそのまま特殊教育にも妥當する。教えこもうとしても、材料は極めて幼稚なものでなければならぬし、又子供の方でなかなか教わろうという氣にはならない。一月も二月もかゝつてやつと字が一つ書けるようになつたり一たす一が出来るようになつたり、それだけが教育ではなからぬ。分り切つたようなことである。しかしこれと似通つたこ

とをしようとして、それが教育だと考えることがどんなに多いことか。字を教えることに限らず、繪が書けるようになる或いは缺を使つて形が切れるようになる、新しい遊戯が出来るようになる、勿論これらは教育による一つの進歩であるかもしれない。だが何々が出来るようになる、というそのことが教育そのものではない。到達すべき目標として一應何かそういうものを定めるかもしれないが、それだけだつたら教育はこちこちのものになつてしまふだろう。特殊教育では殊にそうなる可能性が多い。あらゆる點で遅れているだけに、早く一つでも多く覚えさせようとして、結果を急ぐ。その結果はろくなことはない。何々が出来るようになることを、あせろうが、あせるまいが、子供の方は無頓着である。子供は子供なりに自分の世界を眺めながら、自分の面白いことを熱心にやつている。子供に相應らしい世界を思いきつて作つてやつて、大人もその子供の世界と一緒に入つて考えたらどうだろうか。たゞ外から見ていたのでは思いもかけない世界が開けてくるに違いない。到達しようと思つていた結果は、時がくれば自然に得られるだろう。普通の教育でもこの點はすべて同じだと思ふ。昔は教育というものは、上から與えるものだと思われていた。子供は何も知らないから、教えてやり、教育してやらなければならぬのだ、と。その次には子供は自分自身の興味をもち、自分の要求に従つて自然に教育されてゆくのだから、子供は放つておけばよいのだと考えられた。それで大人や先生は全く第三者的な立場に立つて、子

供を觀察してさえいればそれで十分なのだ。現代は更に進んで、大人は子供と一緒に生活し、一緒の空氣を吸い。一緒に仕事をし一緒に考えることが必要だと思われて來ている。先生が子供の心の中に融けこんで、子供が何を考へているか何を感じているかを知り、一緒に生活して始めて、いろいろな材料やすぐれた教授法も實際に生きて來るのだから。指導意識が強く働いたら教育はぶちこわれてしまう。子供同志と、大人同志と、そして子供と大人と、その間の共同生活を通し、その中に生きた脈膊が通い、それぞれが、それぞれの「人」を尊重し尊敬して、よりよい共同生活を作り上げようと努力する所のみ眞の教育は生れてくる。その共同體の中には、天才もいるし白痴もいる。天才だから輕蔑に價するわけでもなく、白痴だから尊重せよというわけでもない。知能の高い人は高いまゝに、低い人は低いまゝに、もつと一緒に生活をする仕方があるだろうと思ふのである。特殊教育は、「特殊」なものとして又神棚にまつり上げてしまつたら、特殊教育は一部にしか通用しない狭いものになつてしまふ。社會全體が、正常な人達が、特殊な子供を特殊なものとしなくて、一緒に生活出来るような態勢になつて始めて、特殊教育は、意義をもつことが出来るのであるし、教育というものは、こういう特殊な心をも包含出来るような應應なものではなればならないと思ふ。

幼児教育も亦、此の様な教育の一つである。どんな小さな赤ん坊も、又發達の遅れた子供もそれぞれの世界を持つ「人」

である。その一人一人が我々の社會の一員であり、我々大人の社會は彼らの一人一人を受容する程大きくなくてはならない大人が大人の世界のみを固守していたのでは、子供の入つて來る餘地がなくなる。小さな子供の世界に大人が積極的に近づいていつて、一緒に生活出来るような周圍の世界を作つて行く。それが幼児教育である。そこでは子供は子供なりに正當に評價され、過度の重荷を加えられることもなく、第三者的に嫉けられることもない。

特殊兒童と呼ばれる發育遲退兒、乃至は精神薄弱兒にも幼児教育が必要だと云う所以もこゝにある。頭のよい子供達の幼児期の教育だけでなく、すべての子供に幼児期、乳兒期から關心と養護の眼が向けられて然るべきであらう。

#### 四

幼稚園或いは小學校の入學式の時、普通の親達は自分の子供はこんなにお利口だぞ、將來は大實業家か、或いは大學者大政治家かと鼻高々でやつてくる。うちの子は、うちの子はで他の子供など眼中にない。學校に上れない程頭の悪い子供發達の遅れた子供の親は、こんな子でも學校にゆけるでしようか、どのお子さんを見ても、頭のよいお子さん許りのようですがせめて一番後からでも皆についてゆけるといふのですと、と恐る恐る來る。この子供達の親にとつては、子供を出世させようなどという考えは毛頭持てない。たゞ、人の一番後からでも何とかついて行つてくれたら、と望む。たとえつ

いて行けなくても良い、人に馬鹿にされないで、いぢめられないで、せめて楽しい幼稚園生活を、學校生活を送らしてやりたいと望む。將來を考えると全く絶望的にも感じ、先が眞暗な様な氣もしてくる。悲觀的に考えればきりが無い。普通の子供の場合に、樂觀的視すればきりがなく、世界的大學者大政治家を空想するのと同様である。悲觀して涙を流しているよりも、現在を最善に、眼前の此の子供に出来るだけよい環境を與えようと考える。たつた一つの字、或いはたつた一つの計算の問題ではない。もつと大きな、子供自身の問題である。將來を考えないわけではない。しかし現在を離れて將來を考へることは出来ず、現在を最もよく過して行くより他には方法もない。自分の子供についてこれだけ考へるのは容易ではないだろう。我々はかえつて親から多くのものを教えられるのである。

何れの場合にも、教育とは將來のものであると同時に現在のものであり、現在において、温かい愛情と、子供に對する正しい認識と、正當な判斷とを缺いていたら、よい將來は望めないだろう。

父兄の側の純粹な教育愛と、先生の側の教育に對する正しい認識の上に、始めてよい教育が生れる。大……とか世界的……を望む前に、父兄と先生が一緒になつて、よい共同生活の一員を作ろうとする所に教育の目標がある。此の點でも、特殊教育は一般教育と地盤を一つにするものであり、同じ地面の上に立つものである。此の意味からも、私は精神薄弱兒

乃至は發達遲退兒という語から、こういふ子供を侮蔑するような意味合いを除き去りたいと思う。子供同志が馬鹿と云つて彼らを輕蔑し、家庭も、時には先生までも一緒になつて、その子供達、ひいてはその家族をも蔑視するような現状であるので。

## 五

あちらに三人、こちらに二人、と子供が草叢の中をのぞいている。蟻が何かを運んでゐるらしい。何やら譯の分らぬことを一生懸命に保母さんと話している。皆の眼は眞剣である。

子供と共に眞面目になつて話をし、共に笑ひ、共に涙を流すことの出来る心は尊いと思う。その情景は最も純粹な教育場面である。これを教育的センチメンリズムと云うだろうか。もしそう云う人があるなら、それでも構わない。そのセンチメンリズムは良いものである。だがそれは冷靜にして深く物を考へる、眞實なセンチメンリズムである。その中で知性が働けば研究が生れる。知性ある子供主義は、子供の研究の基盤であると思う。幼児期の教育、又特殊教育に關しては、實際に當つて考へねばならぬこと、又調べねばならぬことが山積している。日々子供と生活すると共に、日々新たな問題を生み、解決すべき問題に迫られる。もつとよく知らねばならない。もつとよく考へねばならない。

すべては、子供の氣持に觸れることの出来る心と、良識ある知性とが解決してくれるだろう。